

Archawin Rojanawiwat 論文内容の要旨

主 論 文

Substantially Exposed but HIV-Negative Individuals Are Accumulated in HIV-Serology-Discordant Couples Diagnosed in a Referral Hospital in Thailand (タイの紹介病院において見つかった HIV 血清学的に一致しない夫婦に HIV に相当暴露されたにもかかわらず抗 HIV 抗体陰性の配偶者が蓄積している)

共著者 : Rojanawiwat A、有吉 紅也、Pathipvanich P、
土屋 菜歩、Auwanit W、Sawanpanyalert P

掲載雑誌名 : JAPANESE JOURNAL OF INFECTIOUS DISEASES
62 巻 1 号 32 頁～36 頁、2009 年

長崎大学大学院医学研究科内科系専攻
(指導教授 : 有吉 紅也教授)

緒 言

タイでは 100%コンドームプログラムなどの HIV 感染予防対策が売春宿での HIV 感染拡大に対し著しい効果を上げたが、夫婦間の HIV 感染予防は依然として重要な課題である。これらに対し効果的な予防対策を講じるには、夫婦間 HIV 伝搬の危険因子を明らかにすることが有用である。本研究は、北タイ政府系紹介病院を受診する HIV 感染者とその配偶者において抗 HIV 抗体血清検査結果が不一致の夫婦 (HIV-serology-discordant couples, HDC) の特徴を明らかにし、夫婦間 HIV 伝搬の危険因子を同定することを目的とした。

対象と方法

2000 年 7 月 6 日～2002 年 10 月 15 日に北タイランパン病院 HIV 外来を受診した全 HIV 感染者とその配偶者を対象とし断面調査を実施した。書面での同意を得たのち、社会的背景に関するインタビューを行った。さらに追跡開始時に HIV 感染配偶者の HIV ウイルス量と CD4 細胞数を測定すると同時に、2 人の専門医が身体所見、性感染症 (STD) の既往歴、性行動についての情報を収集した。HDC については 6 か月ごとに抗 HIV 抗体検査を行い夫婦間の HIV 伝搬を前向きに追跡調査を実施した。最終検査日は 2005 年 3 月 2 日とし、追跡期間中に離婚または死別した場合は離婚または死別から 1 カ月後を最終検査日とした。

結 果

調査期間中の HIV 外来受診患者の 97%に当たる 756 名（男性は 320 名、女性 436 名）の HIV 感染者が研究に参加した。このうち配偶者の HIV 感染が判明している 216 名の男性 HIV 感染者において、抗 HIV 抗体陰性配偶者をもつ男性 HIV 感染者の特徴を解析したところ、年齢、感染経路、抗 HIV 薬使用歴、性交渉の回数、STD 既往歴、CD4 細胞数、HIV ウイルス量のいずれにも有意な差を認めなかった。HIV 感染告知前のコンドーム使用状況を 100%と答えた者は配偶者が陰性の群に有意に多かったが ($p < 0.01$)、大部分 (73%) の HDC のコンドーム使用状況は 0%であった。

調査期間中に 71 名の抗 HIV 陰性配偶者が診断され、63 名 (88.7%、男性 25 名、女性 38 名) から抗 HIV 血清追跡情報が得られた。追跡期間は 764 日 (中央値、95%信頼区間 172–1344 日) で計 132.24 person-year-observation (PYO) であった。4 名で抗 HIV 抗体が陽転化し、夫婦間における HIV 伝搬率は 3.02/100PYO (95%信頼区間 0.06–5.98/100PYO) であった。さらに HIV 伝搬に対する危険因子解析を実施したところ、既婚年数が短いことおよび HIV 感染配偶者に HIV 関連の症状がないことが、夫婦間の HIV 伝搬との間に統計的に有意な相関があることが判明した ($p = 0.01$)。

考 察

本研究は、紹介病院において診断された HDC における HIV 伝搬率とその危険因子について前向きに検討したアジアで最初の研究である。本研究では、HIV 感染配偶者の HIV ウイルス量高値、CD4 細胞数低値、エイズ発症、長期の婚姻年数といった先行研究で報告された危険因子は認めず、逆にエイズ未発症、婚姻期間の短さが危険因子であることが判明した。この相違の理由として、本研究の対象が紹介病院への通院感染者夫婦であることから、生物学的に HIV 感染に抵抗性の抗 HIV 抗体陰性配偶者が多く含まれていると推測された。